

## 志賀直哉「城の崎にて」の鑑賞

中野 恵海

### 一、作品の成立

小説「城の崎にて」の書き出しは次の通りである。

——山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、其後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと医者に云はれた。二三年で出なければ後は心配はいらない、兎に角要心は肝心だからといはれて、それで来た。三週間以上——我慢出来たら五週間位居たものだと思へて来た。

右の文中の電車による稀禍のことは志賀の「日記」の「大正二年」の項に次の如くある。

——八月十五日 金

病院。かへつて、「出来事」の了ひを書き直して出来上つてひるね、伊吾来る。起きてそれを読む。将棋をする、晩、散歩に出る、芝浦の埋立地へ行く。水泳を見、素人相撲を見物して、帰り山の手線の

志賀直哉「城の崎にて」の鑑賞

電車に後ろから衝突され、頭をきり背を打った。伊吾が、どうかか  
うか東京病院へ連れていつてくれた。十一時だった。

伊吾も一緒に泊つてくれたのださうだ、母とろく子が来たさう  
だ。

文中、「病院」とあるのは、日記の六月十二日の項に

——前晩よく眠れなかつた。思ひきつて、順天堂に行つて見た。

そして、翌十三日の項に

——午后順天堂。バイキンは沢山ゐるといふ。百日程は少なく見ても毎日通はねばならぬ。二百日通はねばならぬかも知れぬ。今度は全快するまで通はうと思ふ。

とあって、順天堂への通院を意味しているだろう、次に「出来事」

とは勿論、大正二年九月「白樺」第四卷第九号に発表された作品で、  
そのもとになった事実は「日記」によれば大正二年七月二十六日には

——子供が電車にヒカレかゝつた。(出来事)

とあり、つづいて、七月二十八日に、

——帰つて「出来事」を少し書いた。

と、ある。「伊吾」と云うのは勿論、白樺同人で友人の里見淳のことである。

「城の崎にて」に扱かれた事実の電車の怪我<sup>けが</sup>についてのことは右の通りであるが、志賀は八月十五日の夜東京病院に入院し、二十七日に退院した。この後志賀はこの経験を三年半のち大正六年に作品化したのであるが、この間に「いのち」と題する草稿が残されていたことが判明している。執筆年月日の明示はないが「昨年<sup>こぞ</sup>の八月十五日の夜、一人の友と芝浦の涼みにいつた帰り」という冒頭のことばなどより、大正三年のものと推定できる。表題は「いのち（城の崎にて）」となっており、内容は勿論自身の怪我のことではあるが、作品の中で彼は温泉へ行く前にもう一つ程書きたい事があったと云い。一つは「自分が怪我をする二週間程前自分の乗つてゐた電車が芝の広町で三つばかりになる男の児をもう少しでひきかけた出来事」ともう一つは八十何才かの祝をして貰つた老人が、その直後電車の事故で死んだということ、これらの事をからませて「何か生命に対する執着の力といふやうなものを考へずにはゐられなかつた。」という所感を述べている。小動物の死については蜂のほうだけが描かれ、いもりは終りのところに生きた姿で出て来るだけであり、鼠の方は全く出て来ない。テーマの纏り具合とそして全体的な描写を通してのその文芸的価値の面から、この「いのち」が「城の崎にて」にまで昇華されて行つたその過程に、筆者は深い関心を懐<sup>いだ</sup>いている。

この後志賀は、十月十八日より十一月七日まで約三週間、城の崎の温泉旅館三木屋に逗留し、「暗夜行路」前篇の草稿を書きついでりし

たが、帰京後、十二月漱石から武者小路を介して「東京朝日新聞」に連載小説の執筆をすすめられてこれを承諾した。ところが翌大正三年七月になってこの新聞小説の執筆が意の如く進捗せず、中旬に上京し、漱石を訪ねて執筆を辞退した。

その事情については後日書かれた「続創作余談」（昭・13・改造）には次の如くある。

——私は作品によつて、楽に出来る事もあるが、時々随分手古摺る事がある。「暗夜行路」は中でも手古摺つた物と云へるが、本統に手古摺つたのは「暗夜行路」の前身である「時任謙作」といふ所謂私小説の時だつた。大正元年の秋、尾の道<sup>おのちみち</sup>にゐた頃から書き出し、三年の夏までかかつて、どうしても物にならなかつた。

「夏目さんには敬意を持つてゐたし、自分の仕事を認めて呉れた事ではあり」随分頑張るつもりであつたが遂に謝絶の止むなきに到つたのだつた。

——夏目さんは考へ直すやう、そして若しその小説が書けないなら、書けない気持を小説に書けないものと云はれた。私は其時考へてみませうとは答へたが、書けさうな気はしなかつた。翌日<sup>よくじつ</sup>早速断りの手紙を出した。さうしたら夏目さんから、書けた時には必ず朝日新聞に出すやうにといふ大変懇篤なる手紙が来た。ありがたく思つた。

とつづけて述べた志賀は又、

——義理堅い夏目さんにそんな事で迷惑をかけたのは大変濟まない事に感じ、何時かいい物を書いて、朝日新聞に出さうと思つたの

が、他にも理由はあつたが、それから四年程何も作品を発表出来なかつた原因の一つであつた。

と、足掛け四年、実質的には約三年六ヶ月の間創作の筆を断つた理由を自ら述べている。そのうちに漱石が死亡して或る種の気持の解放はあつたものの、

——その後初めて発表した「佐々木の場合」といふ小説を亡き夏目先生にデディケートして僅かに自分の止むを得なかつた不義理を謝した。

とあつて、漱石に劣らぬ義理堅さを見せている。元来、志賀という作家は、思うように書けないときには無理に書こうとしないので、じつと機が熟するのを待つタイプの、自身の気分や気持を重んじる気質の作家であり、この手古摺っている作品「時任謙作」のモデルについて彼は

——モデルに就いて。主人公謙作は大体作者自身。自分がさういふ場合にはさう行動するだらう、或ひはさう行動したいと思ふだらう。或ひは実際さう行動した、といふやうな事の集成と云つていい。

と述べており、この「謙作」の描写に行きつまつたというのが漱石の依頼を一旦は引き受けながら断念せざるを得なくなつた事情であるのだが、何故ゆき詰つたのか筆者はその原因はこの奇禍に起因するものであると考へている。その詳細は次の章で述べる。

## 二、いい気持

この作品の前述の引用の文にひきつづいて次のような文章がある。

——頭は未だ何だか明瞭しない。物忘れが烈しくなつた。然し気分は近年になく静まつて、落ちつきたいいい気持がしてゐた。稲の穫入れの始まる頃で、気候もよかつたのだ。

そしてもう少し読み進んで夕方の方の散歩のことを述べたところに、

——冷々とした夕方、淋しい秋の山峽を小さい清い流れについて行く時考へる事は矢張り沈んだ事が多かつた。淋しい考だつた。然しそれには静かないいい気持がある。

とある。前の引用のところに「落ちつきたいいい気持」とあり、今「静かないいい気持」とある。自己の「気分」「気持」を極度に尊重する志賀という作家に於て矢張り、つづいて出て来るこの表現は重要である。そしてこのあと自分の怪我のことを思い浮かべ、それ程に自分を恐怖させないと述べ、

——然し妙に自分の心は静まつて了つた。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起つてゐた。

とある。このところは極端な言い方になるが、筆者には、「落ちつきたいいい気持」も「静かないいい気持」も共にその根のところはこの「死に対する親しみ」があるからだと感じられる。そしてこの「死に對する親しみの心に立脚する、静かないいい気持」によってこの作品が染め上げられているように思う。

このあと作品には蜂の死骸が描かれて、

——それは見てゐて、如何にも静かな感じを与へた。淋しかった。

他の蜂が皆巢へ入つて仕舞つた日暮、冷たい瓦の上の一つ残つた死骸を見る事は淋しかった。然し、それは如何にも静かだった。

とある。蜂の死を見凝めて、淋しさと共に静けさを重ねて述べている。この静けさもむろん前述の、いい気持とは無縁ではないであろう。そして志賀はつづいてこの怪我の前に書かれた短篇「范の犯罪」に言及し、現在は妻を殺す話でなく「范の妻の気持を主に、仕舞に殺されて墓の下にゐる、その静かさを自分は書きたいと思つた。」と述べる。

——「殺されたる范の妻」を書かうと思つた。それはたうとう書かなかつたが、自分にはそんな要求が起つてゐた。其前からかかつてゐる長篇の主人公の考とは、それは大變異つて了つた気持だつたので弱つた。

右の文中、「長篇の主人公」とは前述の、志賀自身をモデルにした、題名と同じ時任謙作のことである。奇禍のあと、死に対する親しみが起り、殺されて墓の下にいるその静かさを書きたいという要求の起つて来た作者はそのまま「謙作」を書きつづけられなくなった。これが執筆断念の直接的真因である。そして漱石への「済まなさ」の気持がその「慎重さ」に拍車をかけたのである。

### 三、小動物の死

本作品には周知の如く、蜂・鼠・いもりの死が描かれている。芥川竜之介はこの作品を志賀の作品の中の最もすぐれたものの一つに数えていたという事であるが、その大きな賞賛の要素のひとつはこれ等小動物の姿の描写にあるのではなからうか。以下その描写について述べてみたい。

最初の蜂の描写に於て、谷崎潤一郎がその名著「文章読本」の中でこの部分を引用して賞賛した事は有名である。今彼が傍点を打つた部分のみをあげると次の如くである。

——蜂は羽目のあはひから摩抜けて出ると一ト先づ玄関の屋根に下りた。其処で羽根や触角を前足や後足で丁寧まことに調へると、少し歩きまはる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を両方へしつかりと張つてぶんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなつて飛んで行く。

谷崎はこれについて

——私が点を打つた部分を読むと、一匹の蜂の動作を仔細に観察して、ほんたうに見た通りを書いてゐることが分る

と述べ、更に

——簡にして要を得てゐると賞賛している。

次には鼠が描かれる。川に投げ込まれて泳いでいるのであるが首の所に七寸ばかりの魚串さかなしが刺し貫してあつた。

——鼠はどうかして助からうとしてゐる。顔の表情は人間にわからなかつたが動作の表情に、それが一生懸命である事がよくわかつた。

極限にまで追いつめられて切羽つまつた必死の鼠の姿が、これ又適確に生き生きと描かれている。そして「死ぬに極つた運命を担ひながら、全力を尽して逃げ廻つてゐる様子が妙に頭につ」き、その姿に作者はあの怪我をした自分の姿を重ねて、あれが生物の本来の姿なのだと思ひ、自分の希つている静かな死の世界に到り着く前のああいふ動騒は恐ろしいと感じたりしている。そして最後にいもりの死が描かれる。それは

——そんな事があつて、又暫くして、或夕方、

というふうには散歩の途上でのこととして叙される。そしてその描写に移る前に、桑の葉の描写がある。

——大きな桑の木が路傍にある。彼方の、路へ差し出した桑の枝で、或一つの葉だけがヒラ／＼ヒラ／＼、同じリズムで動いてゐる。風もなく流れの他は総て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラ／＼ヒラ／＼と忙しく動くのが見えた。

不思議に思つて見ていると、風が吹いて来て、かえつてその葉が動かなくなつてしまつたというのである。何故志賀はいもりの死の描写の前にこのヒラ／＼動く桑の葉を書いたのか。この事の前に筆者は、あの鼠の死の描写のとき、傍の洗場で餌を漁る、頓狂な顔をしたあひるを併せて書いていることを思ふのである。勿論、このあひるのあわてた動作のなかに、しかしどこか間の抜けたその姿はあひるの特徴を

あらわすと共に、鼠の必死の姿をくっきりさせている。この対照的な印象の効果を計算に入れてのことであると思われる。そして今、いもりの場面のこの桑の葉の描写は、いもりの死に寄せる作者の「生き物の淋しさを一緒に感じる」心情を強調する、その雰囲気づくりにあるのではないかと思われる。雰囲気づくりにという事に関してはあるが特にこのいもりの場合に関心が寄せられるのは時間の経過についての描写に細かい心遣いの見られる事である。桑の葉の直前、

——物が総て青白く、空気の肌ざわりも冷々として、とあり、その直後に

——段々と薄暗くなつて来た。

とある。そしていもりの死が描かれるが、そのあと、その場所にしやがみこんで「いもりと自分だけになつた」ような淋しい気持になつて、

——漸く足元の見える路を温泉宿の方に帰つて来た。遠く町端れの灯が見え出した。

という風な暗さに、あたりはなつてゐる。そして蜂、鼠の死の姿と自分の死なずに済んだ姿を重ねて

——自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬやうな気もした。然し実際喜びの感じは湧き上つては来なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした。

この感懐は、前述（二章）の「死に対する親しみの心」を小動物の死を内容とするこの作品の最後にそのしめくくりとして述べたもので

ある。そしてこう結ばれる。

——もうかなり暗かつた。視覚は遠い灯を感じるだけだつた。足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確だつた。只頭だけが勝手に働く。それが一層さういふ気分自分に誘つて行つた。

仲間のものから全く関心を払われなかつた蜂の死の孤独な姿、死ぬに決つた運命を脊負いながら腕く鼠、そして又いもりの余りにも偶然に支配された死、そこに通じるものは人間をも含めての「生き物のもつ淋しさ」というものである。どうやらこの作品のテーマはこゝら辺にあるようである。そして前述の「ヒラ／＼動く桑の葉」は薄暗がりの中での一種神秘的な雰囲気づくりの爲のものと思える。この薄暗がり、もうかなり暗かつたという風になり、「足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確だつた」は重要である。ここまで来れば、これは生物の総じて持つ、その淋しさやその生の不確かさに通じるものであるだらうからである。

#### 四、小動物の描写

「創作余談」(昭・三三)には、

——「城の崎にて」これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、あもりの死、皆その時数日間に実際目撃した事だつた。そしてそれから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小説といふものでも余裕から生れた心境ではなかつた。とある。蜂と鼠の描写のことは多少前述したので、いもりの描写に

言及したい。例の「志賀日記」に、次のような記述がある。

——(大正二年)十月三十日 木

蜂の死と鼠の竹クシをさゝれて川へなげ込まれた話を書きかけてやめた。

これは長篇の尾道に入れるつもりにした

右の「長篇の尾道」とは勿論「時任謙作」を意味しているが、翌日の十月三十一日の項には「これは次の日の夕方の事だつた」として次の記事がある。

——づつと上の方まで歩いていった。岩の上のやもりに石を投げたら丁度頭に当つて一寸尻尾を逆立て、横へ這つたぎり死んで了つた、(夕方の山道の流れのワキで)

右は日記の文章であるが同じ志賀の手に成る「城の崎にて」という文学作品のこの箇所の文章を引いてみる。

——石はこつといつてから流れに落ちた。石の音と同時に蟻蝮は四寸程横へ跳んだやうに見えた。蟻蝮は尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思つて見てゐた。最初石が当つたとは思はなかつた。蟻蝮の反らした尾が自然に静かに下りて来た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて、前へついでゐた両の前足の指が内へまくれ込むと、蟻蝮は力なく前へのめつて了つた。

何という違いであるか、と筆者は思つてしまふ。当然のことながら、引用の日記の文は単なる事実のメモであり、右の文は芸術作品たるものだからである。この作品の価値と魅力の一半はこれ等小動物のリアルな描写にあることを泌々思わざるを得ない。志賀は周知の如く

日本近代文学独特のジャンルといわれている「私小説」の完成者であり、且つ又大正リアリズムと云われた文章に於てその最高の模範、その極北を示したと云われている。そのことを念頭に置きつつ、今一度写生、写実という事の意味と価値について一考したい。蜂や鼠やいもりの姿を如実に描いて、そこにどの様な価値が存するのか。難しい問題である。ここで筆者は絵画を例に出してみたい。竹内栖鳳はすずめの絵が得意であったと伝えられている。彼が紙の上に絵筆を落としたら雀になったという逸話もある。栖鳳描くところの雀の絵とカラー写真の雀と何処が違うのであるか。幼稚な質問ではあろうが詮ずるところその芸術的価値の相違という事になるだろう。姿、形態をただ克明に表わした文では駄目なので、作者の主観を通してそのものの本質に迫らなくてはならない。雀の姿だけではなく、その生命を描かなくてはならない、という事になるだろう。蜂を描いて、鼠を描いて、そしていもりを描いて、この「城の崎にて」はどこまでその表現が到り得ているだろうか。それは近代文学中の白眉なりと云い得るものである。と筆者は確信している。

## 五、むすび

「城の崎にて」という作品は、大正二年八月十五日に作者が山の手の線の電車に跳ねられるという稀禍に会い、その後養生のため一人で城の崎温泉に出掛けた体験をそのまま作品の材料に採り上げて成ったものである。九死に一生を得た体験から作者は今までにない「死に対す

る親しみ」を覚え、「死の静かさ」を書きたい要求が起って、その為に執筆中の「時任謙作」の主人公の考えと違いが生じて書きすすめられなくなり、夏目漱石の朝日新聞への執筆要請を遂に断念謝絶のやむなきに至った。そのことがもとで志賀は実際、三年半の間作品発表を止めた。そうした沈黙を破って発表されたこの作品にはその経過が語られ「謙作」を脱却、生長した主人公の心境が述べられる。内容的には温泉宿で見聞きした小動物の姿が特にその死に焦点を当てられて描かれる。蜂の孤独な死、鼠の必死の動騒、そしていもりの余りも偶然的な死が志賀自身の怪我の体験を通してその主観に裏打ちされて「生物の持つ淋しさと生存の不確かさ」というテーマがうち出された。このときの小動物たちの姿の描写がその面での最高の模範を示す程の水準に達しその芸術性を發揮した。右のことが渾然として簡潔をきわめた作品として描き出されているところにこの作品の意義と価値とが存し、漱石の好意に応えるに足る芸術家としての真の回答があることを重ねて述べて置きたい。